

# 『紫式部日記』の批評精神と作家意識

—ジェンダーの視点を入れて—

鄭 順 粉\*

(e-mail : sunbun@pcu.ac.kr)

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 平安文学と批評
  3. 男性的批評と女性的批評
  4. 女房の教養や才能を批評すること
  5. おわりに
- 

### 1. はじめに

平安女流日記文学をどう定義すべきかの問題は、未だに難題の一つである。先学によって多くが明らかになってはいるものの、平安女流日記文学は依然として私たちが持っている文学的概念—それは主に近代以降の西洋の概念である—にうまく当て嵌まらず、理解に苦しむところがある。それは、ある意味では、平安女流日記文学が現代の文学ジャンルの枠を遥かに超えるところに存在し、複雑で独特な性格を持っていることを表わすことにもなる<sup>1)</sup>。

例えば、『源氏物語』の作者の手による『紫式部日記』は、現在日記(文学)として分類されているが、実際本文は日記記録的な部分と消息文批評的な部分と二つの部分から成っている。今までは、作品の全体的な性格を考えたせいも、日記記録的な性格を中心に論じられる場合が多く、後半の消息文批評的な部分に関する考察も、日記的

---

\* 培材大学校 日本学科 副教授 日本古典文学

1) 特に、西洋では近代文学ジャンルの概念の中に当て嵌まらないことを大きく意識しており、『紫式部日記』の理解に苦しむ様子が論文や本などに表わされている。それについては、拙稿(2009)「外国文学受容と翻訳問題」(『日本文化学報』40 韓国日本文化学会)において紹介されている。

性格の中に収束されがちであった。例えば、消息文批評的な部分における歯に衣着せぬ批評ぶりを、紫式部の厳しい性格の一面として結論づける場合も度々あったのである<sup>2)</sup>。そこで、本稿では、『紫式部日記』の批評的な性格を独立的に取り上げて、その真の意味と意義について考えてみようと思う。この批評性こそ、実は他の平安女流日記文学にはあまり見られない、『紫式部日記』の独自の性格であり、またそれは『源氏物語』という長編物語を創作する作家意識にも深く繋がっていると考えられるからである。

## 2. 平安文学と批評

批評とは、大体「物事の是非・善悪・正邪などを指摘して、自分の評価を述べること」と定義できる。文芸の分野としては、近代以後の概念であるが、日本の古典文学にもそれに値するものが見付けられる<sup>3)</sup>。

日本文学における批評の展開は、和歌の発達と密接な関わりを持つ。歌集類の蓄積による作者や作品需要の増加は、自然に優秀集団を弁別しようとする批評の欲求を刺激するようになった。批評欲求の拡散によって多様な批評が展開されたわけであるが、そのような批評欲求は歌集の編纂によって表面化した。数多くの和歌から何かの基準によって採録する歌を選集する段階で歌の優劣を判断する批評が入る。そのような和歌に対する批評精神は、『古今集』編纂に来て歌論の形として結実を見るようになる。その『古今集』における和歌評論は、紀貫之の「仮名序」と紀淑望の「真名序」の二つの序文において表わされ、特に、紀貫之の「仮名序」は、日本文芸における本格的な歌論として初めてのものであり、歌学のさきがけとしても評価されている。当時の歌壇の第一人者である紀貫之は、「仮名序」において、和歌の本質や効用、和歌の歴史的な変遷、種類、内容などについて論理的な叙述を繰り広げ、代表的な歌人については次のような批評を行う。

古より、かく伝はる内にも、平城の御時よりぞ、広まりにける。かの御世や、歌の心を、知ろし召したりけむ。かの御時に、正三位、柿本人麿なむ、歌の仙人なりける。これは、君も人も、身を合わせたりと言ふなるべし。秋の夕べ、竜田河に流るる紅葉をば、帝の御目に、錦と見給ひ、春の朝、吉野山の桜は、人麿が心には、雲かとのみなむ覚えける。

2) 例えば、三上満(1980)「紫式部の批評意識—時代とのかかわりをめぐって」(『中古文学論攷』1 早稲田大学中古文学研究会)などに言及がある。

3) 例えば、水谷真人(2001)「批評の共同体意識について」(『早稲田文学』26-3 早稲田文学会)や同氏(1999)「批評と文芸批評と」(『群像』54-6 講談社)、高橋昌子(1992)「批評について」(『日本近代文学』46 日本近代文学会)などは、日本の批評に関する論文として有用である。他に、日本の古典文学の批評論としては、鈴木日出男(1992)の「古代文学における批評と言葉」(『日本文学』41-4 日本文学協会)が示唆的である。

又、山の辺の赤人と言ふ人有りけり。歌に奇しく、妙なりけり。人麿は、赤人が上に立たむ事難く、赤人は、人麿が下に立たむ事難くなむ、有りける。この人々を置いて、又、優れた人も、呉竹の、世世に聞え、片糸のよりよりに絶えずぞ有りける。これより前の歌を集めてなむ、万葉集と名付けられたりける。(中略)

そのほかに、近き世にその名聞えたる人は、すなはち、僧正遍照は、歌のさまは得たれども、まことすくなし。たとへば、絵にかける女を見て、いたづらに心を動かすがごとし。

(中略)

在原業平は、その心余りて、詞たらず。しほめる花の色なくて匂ひ残れるがごとし。(中略)

文屋康秀は、詞はたくみにて、そのさま身におはず。いはば、商人のよき衣着たらむがごとし。(中略)

宇治山の僧喜撰は、詞かすかにして、始め終りたしかならず。いはば、秋の月を見るに暁の雲にあへるがごとし。(中略)

よめる歌多く聞えねば、かれこれをかよはして、よく知らず。

小野小町は、古の衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、つよからず。いはば、よき女のなやめるところあるに似たり。つよからぬは女の歌なればなるべし。(中略)

大友黒主は、そのさまいやし。いはば、薪負ふる山人の花の蔭に休めるがごとし。(下略)

(『古今集』仮名序)<sup>4)</sup>

冒頭で和歌の本質とは何かを解き明かした後、和歌の成り立ちについて述べながら和歌を六分類し、和歌のあるべき姿を論じる中で二人の歌聖(柿本人麻呂と山部赤人)を理想像として挙げてから近代の高名な六人の歌人(六歌仙)を挙げて批評している。いわゆる六歌仙の歌についての紀貫之の批評を簡単に要約すると、僧正遍照は真実味なく、在原業平は表現不足であり、文屋康秀は表現技巧が内容に伴わず、喜撰は用語が不明確で歌の首尾がまとまらず、小野小町は印象が強くなく、大伴黒主は卑俗である、ことになる。柿本人麻呂と山部赤人の二人を「歌聖」として特別の扱いをしており、それに対して六歌仙についてはその二人には遠く及ばないとして、あまり良い評価はされていない。しかしながら、一方では、六歌仙以外の歌人は評価にすら値しないと言っているため(「このほかの人々、その名聞こゆる野辺に生ふるかづらの這ひ広がり林にしげき木の葉のごとくに多かれど、歌とのみ思ひてその様知らぬなるべし」)、逆に六人を評価していることにもなる。

この『古今集』の仮名序の歌論は、以後、平安時代の『和歌九品』(藤原公任)や鎌倉時代の『古来風体抄』(藤原俊成)『近代秀歌』(藤原定家)『無名抄』(鴨長明)、そして南北朝時代の『近來風体抄』(二条良基)のような歌論書の先駆的な存在として和歌発展に多大な影響を及ぼす<sup>5)</sup>。

4) 『古今集』の本文引用は、新日本古典文学大系本(小島憲之・新井栄蔵共編 岩波書店 1989)による。pp. 24-28

また、平安時代の和歌に対する批評は、歌合の発達に伴いますます盛んになる<sup>6)</sup>。歌合は、歌人を二組に分け、決められた題で歌を一首ずつ作る、一種の歌遊びで、その歌の優劣を、判者とよばれる審判が勝ち負けを決めることになっている。平安時代には、歌合が五〇〇回ぐらい行われており、歌の競い合いとともに歌に関する批評欲も最高潮に上がった時期である。有名なものとしては、光孝朝に行われた「在民部卿家歌合」(885)や宇多朝に開かれた「寛平御時后宮歌合」(889)、「是貞親王家歌合」(仁和二宮歌合)(893)などがあり、また十世紀のものとして「亭子院歌合」(913)や「天徳内裏歌合」(960)などがある。中で、「亭子院歌合」は、『古今集』編纂の後の、より高揚された和歌への批評の勢いを象徴するものとして見られる。

#### 延喜十三年三月十三日亭子院歌合

左頭、女六宮。方の親王、御兄の中務の四の親王・彈正の五の親王。中納言藤原定方朝臣・左衛門督有実朝臣。歌よみ、藤原興風・凡河内躬恆。方人、到行・好風らなむ。右頭、女七宮。方の親王、御兄の上野の八宮・清和貞数の八宮。中納言源昇朝臣・右衛門督清貫朝臣。歌よみ、是則・貫之。方人、兼覧の王・きよみちの朝臣。帝の御装束、椴皮色の御衣に承和色の御袴。男・女、左は赤色に桜襲、右は青色に柳襲。左は歌よみ・員刺の童、例の赤色に薄蘇芳綾の表袴、右には、青色に萌黄の綾の表袴。方々親王、青色・赤色みな奉る。方の宮たち、みな装束めでたくして州浜奉る。大夫四人昇けり。楽は黄鍾調にて、伊勢海といふ歌をあそぶ。右の州浜は午時に奉る。大きな童四人、角髪結び糸鞋穿きて昇けり。(下略)<sup>7)</sup>

これは、延喜十三年(913)三月十三日、宇多法皇が故七条后温子の邸宅で上皇御所となっていた亭子院において催した歌合である。題は二月(初春)・三月(季春)・四月(夏)・恋で、各十番二十首をつがえる予定だったが、時間の都合で夏と恋とを半分にして、三十番六十首が披講された。判者は宇多法皇の勅判で、判詞は記録されているもの

5) 三上満氏の前掲論文には、平安時代に批評精神が旺盛なのは、『後撰集』前後の時代の特に散文作品の特色であるとされ、『宇津保物語』の三春高基や滋野真菅等によって示される反貴族的な独自の価値観や、漢詩文をはじめとする作品等に見られる社会的な批評意識、『蜻蛉日記』に見られる兼家への批判的な記述が指摘されている。この場合は不遇意識を共通項とされているので、人の才能や教養を批評する本稿の主旨とやや離れている。

6) 歌合に関しては、総合的なものとしては、萩谷朴(1951)「平安時代歌合史各説(一)」(『日本文学史研究』15 日本文学史研究会)があり、女性との関連からは、杉山康彦(1950)「平安朝の女性と和歌—歌合を中心に」(『国語と国文学』27-12 東京大学国語と国文学会)や浜島智恵子(1961)「平安女流歌合の研究」(『愛知県立女子大学説林』8 愛知県立女子大学国文学会)、そして日記との関連性からは、宮崎荘平(1994)「女房日記と歌合日記—その同質性についての再説」(『平安日記文学の研究』勉誠出版)がある。

7) 『歌合集』の本文引用は、日本古典文学大系本(萩谷朴・谷山茂 岩波書店 1965)による。p. 53

ではもっとも古く、滑稽味があっておおらかな行事の雰囲気をよく伝えている。作者は、法皇、凡河内躬恒、藤原興風、紀貫之、坂上是則、伊勢、大中臣頼基などの当代有数の歌人達であり、「桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける」(貫之)、「桜花散りぬる風の名残りには水なき空に波ぞ立ちける」(同)など秀歌も多く詠まれている。行事の経緯を記した仮名日記は伊勢の作といわれ、形式的にも整った晴儀であった。歌題の提示から当日まで一ヶ月の期間をおき、進め方や左右双方の衣裳、歌を書いた色紙を置く州浜にいたるまで周到に準備されたもので、その典雅さなどで後世の歌合の手本となっている<sup>8)</sup>。

このように、平安時代には、和歌の優劣を論じることが、日常の文芸生活の中で頻繁に行われていたことが伺われ、特に、和歌を判定する判詞が発達していた。この判詞はだんだんと文学的な性格を帯びようになり、歌論へとつながっていったのである<sup>9)</sup>。歌合は、基本的に遊びであるが、平安期には歌の優劣が出世にもかかわる重大事であったため今日行われるような気軽なものではなかった。また、時代が下るにつれて文学性が高くなり、前述のように判詞が文学論・歌論としての位置づけを持つようになるのである。

そのような歌壇での動きは、当然散文文学の世界にも影響を及ぼした。平安初期から中期にかけて歌壇の第一人者であった紀貫之は、平安日記文学の嚆矢である『土佐日記』においても和歌に関する批評を行っている。作中和歌について自分の感想や批評を述べるだけでなく、万葉の歌人についても、次のような意見を述べている。

廿日の夜の月出でにけり。山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。かうやうなるを見てや、昔、阿部の仲麻呂といひける人は、唐土に渡りて、帰り来ける時に、船に乗るべき所にて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。飽かずやありけむ、廿日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麻呂の主、「わが国にかかる歌をなむ、神代より神も詠ん給び、今は上中下の人も、かうように別れ惜しみ、喜びもあり、悲しみもある時には詠む」とて、詠めりける歌、

青海振り放け見れば春日なる三笠の山に出でし月かも  
とぞ詠めりける。かの国人、聞き知るまじく思はへたれども、言の心を、男文字に様を書き出だして、ここの言葉伝へたる人に言ひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひの外になむ賞でける。唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じことなるべけれ

8) 亭子院歌合については、宇留田初実(1999)「『亭子院歌合日記』における〈記録〉と〈表現〉」(『緑岡詞林』23 青山学院大学日文院生の会)に詳しく述べられている。

9) 歌合の判詞については、西村加代子(1990)「歌合判詞と和歌の創作」(『和歌文学研究』60 和歌文学会)や小野寺迪子(1970)「歌合判詞の研究」(『国文鶴見』5 鶴見大学日本文学会)などに詳しく述べられている。

ば、人の心も同じことにやあらむ。さて、今、当時を思ひやりて、ある人の詠める歌、  
都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

(『土佐日記』)10)

承和五年(935)一月二十日、土佐国から帰京する途中の室津で、紀貫之は、月の光に催され、万葉時代の阿部仲麻呂を思い出す。阿部仲麻呂は、靈龜二年(716)留学生として唐に渡り、そのまま唐の朝廷に仕えたが、天平勝宝五年(753)帰国の途中遭難、安南に漂着して再び唐にもどり、宝龜元年(770)、在唐五十四年で、かの地で没した人である。「青海振り」歌は、阿倍仲麻呂が帰国する時に唐の人々が送別を惜しんで漢詩などを作った際に海から出た月を見て詠んだ望郷の歌である。下線を引いた「わが国にかかる歌をなむ…」の部分は、『古今集』仮名序における和歌起源論を踏まえた言説として見られ、特に「上、中、下…」の部分は、仮名序の「生きと生けるもの、いづれか歌をよまざりける」の主張を敷衍するものとして解される。阿倍仲麻呂の挿話を通じて繰り広げられる紀貫之の歌論は、日本初の翻訳論とも言うべきものであり、『古今集』「仮名序」における和歌批評のレベルを遥かに超えているところに成り立っていると見られる。

### 3. 男性的批評と女性的批評

以上のように、平安時代には和歌の隆盛に伴いそれに関する批評も発達していたことが伺われるのであるが、ここで注意したいことが一つある。この時代、和歌を批評する主体は、男性だったのである。

歌は、紫檀の筥小さくて、おなじごと入れたり。上達部、階の左右にみな分かれてさぶらひ給ふ。女蔵人四人づつ左右にさぶらはせ給ふ。歌の講師は女なむつかまつりける。御簾一尺五寸ばかり巻き上げて歌よまむとするに、上の仰せ給ふ。「この歌を誰かはき囃してことわらむとする。忠房やさぶらふ」と仰せ給ふ。「さぶらはず」と申し給へば、寂寂しがらせ給ふ。右は勝ちたれども、内の御歌二つを勝にておきたれば、右一負けたり。

(「延喜十三年三月十三日亭子院歌合」序文)11)

これは、前述したように、宇多法皇が故后藤原温子の邸亭子院において催した歌合で、後の歌合に一つの模範になったものである。和歌文芸に特別な関心を持つ法皇を中

10) 『土佐日記』の本文引用は、新編日本古典文学全集本(菊地靖彦 小学館 1995)による。pp. 33-34

11) 前掲書 p. 54

心に、皇子・皇女・側近の侍臣を集めて行われたもので、君臣渾然一体となった和気藹々たる雰囲気の特徴と言える。この場合、判者として予定された藤原忠房が参仕しなかったため、法皇自ら判者を務めた旨が下線を引いた部分のように記されているのである。

内裏和歌合 天徳四年三月三十日、於清涼殿有此事

題 霞 柳 桜 款冬 藤 暮春 首夏 卯花 郭公 夏草 恋  
歌人 左 朝忠卿 坂上望城 橘好古 大中臣能宣 少弐命婦 壬生忠見  
源順  
右 平兼盛 藤原元真 中務 藤原博古  
講師 左 延光朝臣  
右 博雅朝臣  
判者 左大臣

(「天徳四年三月三十日内裏歌合」)<sup>12)</sup>

この場合も、判者は、左大臣の藤原実頼で、男性貴族であったことが確認される。晴儀歌合には主に判者として重大堪能の人物を当てていたものであり、それはある程度高位職の男性官僚だったのである。

歌合で、女性が務めた役名で、講師というものがある。講師は出詠された歌を実際に詠み上げる朗詠者の役で、歌合ではわりと重要な役割と言える。例えば、「亭子院歌合」においては、ほんの少し上に持ち上げられた簾の後ろに座った女性が歌を詠み上げるといった形が取られていた。しかしながら、そのような任務もまもなく女性の手から離れていった。歌合の形式化・儀式化と強く結び付いていくことによって、歌合への参加および役割の割り当てにおける政治的意味合いが強まっていったためである。他に、歌合で女性に任された重要な役割の一つに、仮名日記の筆録がある。初の仮名日記は女流歌人の伊勢によるもので、その後仮名日記の記録は常に女性に任されていた。その仮名日記を見ると、

かかるほどに日いといたく暮れぬ。又藏人藤原の重輔を召して、遅きよし仰せ給ふ。ものささも見えぬほどに州浜奉る。童打敷とりて参る。かへりて又四人州浜昇りて参る。装束赤色に桜襲なるべし。されど見えぬはかひなし。算刺の州浜又童持たり。すべて六人の童なり。大きさとのおぼらずといふ。珍材童の中にまじりて騒ぐ。童大きにかたはにもあらじとおもひたるなるべし。  
(「天徳四年三月三十日内裏歌合」仮名日記)<sup>13)</sup>

のごとく、所々批評が述べられている。ところが、批評の対象は、参加者の装束に関する感想や批評に留まっている。歌などの才能に関するものではなかったのである。そのような様

12) 前掲書 p. 78

13) 前掲書 p. 95

子は、他の歌合の仮名日記においても確認される。「なまめかしきことはあれど、おもしろきことは左に劣れり」（「延喜二十一年京極息所褒子歌合」仮名日記）や「丈のほど髪の長さよくととのひてかたほならず」（「天徳四年内裏歌合」仮名日記）などの例がそれである。

このように、当時、女性は主に人物の装束について批評をし、和歌や漢詩文などの才能や学識に関する批評は、男性貴族に占有されていたと見られるが、それは他の散文文学においても多く確認できることであった。『紫式部日記』とほぼ同時代の『枕草子』を見てみよう。

二月のつごもりに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿司来て、「かうてさぶらふ」と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の」とであるを見れば、懐紙に、

すこし春あるここちこそすれ

とあるに、げに、今日のけしきにいとようあひたるを、これが本は、いかでか付くべからむと、思ひわづらひぬ。「誰々か」と問へば、「それぞれ」と言ふ。皆いとはづかしき中に、宰相の御答へを、いかでかことなしびに言ひいでむ、と、心一つに苦しきを、御前に御覽ぜさせむとすれど、上のおはしまして御殿籠りたり。主殿司は「とく、とく」と言ふ。げに、遅うさへあらむは、いと取り所なければ、さはれとて、

空寒み花にまがへて散る雪に

とわななくわななく書いて取らせて、いかに思ふらむと、わびし。これがことを聞かばや、と思ふに、そしられたらば聞かじとおぼゆるを、「俊賢の宰相など、『なほ内侍に奏してなさむ』となむ定めたまひし」とばかりぞ、左兵衛の督の、中將にておはせし、語りたまひし。

（『枕草子』102段）<sup>14</sup>

清少納言が藤原公任から『白氏文集』の一句を踏まえた和歌の下句をもらってその返事に苦しむ場面である。この他にも、『枕草子』の中には、清少納言が藤原公任や藤原齐信のような当代きっての男性教養人に和歌や漢詩文に関する素養を試され、返事に苦悩し、その評価を恐れている様子が随所に描かれている<sup>15</sup>。

『紫式部日記』の中にも、和歌に対する男性知識人の批評を意識する場面が多く見かけられる。例えば、土御門第で催された産養の夜の宴についての記事がある。

上達部、座を立ちて、御橋の上にもるりたまふ。殿をはじめたてまつりて、攤うちたまふ。かみのあらしひ、いとまさなし。歌どもあり。「女房、さかづき」などあるをり、いかがはいふ

14) 『枕草子』の本文引用は、角川文庫本(石田穰二 角川書店 1979)による。pp. 147-148

15) 清少納言と公任との緊張関係については、拙稿(2001)「枕草子の漢詩文受容—102段の連歌を中心にして」(『日語日文学研究』38 韓国日語日文学会)に詳しく述べられている。

べきなど、くちくち思ひころみる。

めづらしき光さしそふさかづきはもちながらこそ千代をめぐらめ

「四条の大納言にさしいでむほど、歌をばさるものにて、声づかひ、用意いるべし」など、ささめきあらそふほどに、こと多くて、夜いたうふけぬればにや、とりめきあらそふほどに、こと多くて、夜いたうふけぬればにや、とりわきても指さでまかでたまふ。

(寛弘五年九月十五日条)<sup>16)</sup>

その夜、女房達は、賀歌を献進しなければならなくなりそうだったので、緊張しており、紫式部も例外ではなかった。彼女達は、めいめいに想いを練りながら、「四条の大納言(公任)にさしいでむほど、歌をばさるものにて、声づかひ用意いるべし」などと、「ささめきあらそつ」ていたという。皆が、公任を当代最高の文化人と認め、畏敬の目差して眺めていたわけであるが、紫式部は、そうした人々の表情を書き記すことによって、公任の位置を、しっかりと見定め、確認しているのである<sup>17)</sup>。

結局、平安時代、和歌や漢詩文などの学識に関する批評は主に男性貴族に任されており、女性達は人々の装束について述べるのが一般的だったように見受けられる<sup>18)</sup>。

『紫式部日記』において、行事に臨んだ女房達の容貌に関する描写とともに紫式部自身の感想や批評を述べているのは、当時の一般的な傾向として見て差し支えないだろう。

『紫式部日記』の次の場面も、その一例である。

御簾の中を見わたせば、色ゆるされたる人々は、例の青いろ赤いろの唐衣に地摺の裳、表着は、おしわたして蘇芳の織物なり。ただ馬の中将ぞ葡萄染を着てはべりし。打物どもは、濃き薄き紅葉をこきませたるやうにて、なかなる衣ども、例の、くちなしの濃き薄き、紫苑色、うら青き菊を、もしは三重など、心々なり。綾ゆるされぬは、例のおとなおとなしきは、無紋の青いろ、もしは蘇芳など、みな五重にて、かさねどもはみな綾なり。大海の摺裳の、水の色はなやかに、あざあざとして、腰どもは固紋をぞおほくはしたる。桂は菊の三重五重にて、織物はせず。わかき人は、菊の五重の唐衣を心々にしたり。上は白く、青きが上をば蘇芳、ひとへは青きもあり。上薄蘇芳、つぎつぎ濃き蘇芳、中に白きませたるも、すべて、しぎまをかしきのみぞ、かどかどしく見ゆる。いひ知らずめづらしく、おどろおどろしき扇ども見ゆ。

(寛弘五年十月十六日条)<sup>19)</sup>

16) 『紫式部日記』の本文引用は、新編日本古典文学全集本(中野幸一 小学館 1994)による。pp.145-146

17) 当時藤原公任の位置については、例えば、拙稿(2003)「藤原公任から見た枕草子の漢詩文受容—同時代における評価の模索」(『平安文学の風貌』武蔵野書院)などに詳細に述べられている。

18) 勿論『紫式部日記』にも当時の女房日記を継承して女房たちの容貌に関する感想や批評が多く述べられている。それについては、増田勝一(1993)「紫式部の容貌描写」(『並木の里』38 笠間書院)などに詳しく述べられている。

19) 前掲書 pp. 155-156

また、消息文批評的部分における、周りの女房の容貌や性格に述べる次の部分も、その延長線で考えることができよう。装束だけでなく、心ばせにまで及んで述べているという点で、やや進んだ述べ方と言える。

このついでに、人のかたちを語りきこえさせば、ものいひさがなくやはべるべき。ただいまをや。さしあたりたる人のことは、わづらはし、いかにぞやなど、すこしもかたほなるは、いひはべらじ。

宰相の君は、北野の三位のよ、ふくらかに、いと様態こまめかしう、かどかどしきかたちしたる人の、うち見たるよりも、見もてゆくに、こよなくうちまさり、らうらうしくて、口つきに、恥づかしげさも、にほひやかなることも添ひたり。もてなしいとびびしく、はなやかにぞ見えたまへる。心ざまいとめやすく、心うつしきものから、またいと恥づかしきところ添ひたり。

小少將の君は、そこはかとなくあてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳のさましたり。様態いとうつしげに、もてなし心にくく、心ばへなども、わが心とは思ひとるかたもなきやうにものづつみをし、いと世を恥ぢらひ、あまり見ぐるしきまで兎めいたまへり。腹ぎたなき人、悪しきまにもてなしいひつくる人あらば、やがてそれに思ひ入りて、身をも失ひつべく、あえかにわりなきところついたまへるぞ、あまりうしろめたげなる。(中略)

かういひひひて、心ばせぞかたうははべるかし。それも、とりどりに、いとわろきもなし。また、すぐれてをかしう、心おもく、かどゆゑも、よしも、うしろやすさも、みな具することはかたし。さまざま、いづれをかとるべきとおぼゆるぞおほくはべる。さもけしからずもはべることもかな。

(『紫式部日記』女房評条)<sup>20)</sup>

「心ばせ」の中でも「すぐれてをかし」「心おもし」「かど」「ゆゑ」「よし」「うしろやすさ」、これらをすべて兼ね備えることが、女房の理想である。「あはれ」ではなく「をかし」、しみじみと主観に訴えかけるよりも、知的かつ客観的に風流をアピールする力を式部は女房に求めている。しかしそこに「心おもし」、落ち着きがないといけな。 「かど」「ゆゑ」「よし」、才気と生得の風情と教養とは、個人の魅力であると同時に応接など女房業務の質を大きく左右する。そして「うしろやすさ」、安心して仕事を任せられる頼もしさである。式部が理想としたのは、このように、実務をしっかりこなす能力を持ち、しかも配慮がある上で、品位ある知性と教養をきらめかせる女房であった。

このような思想に貫かれているからこそ、私人紫式部にとってかけがえのない友人である小少將が、自己決定能力に欠け人間関係に弱い点が強調され、一方心を割った付き合いがあったとは思えない宮の内侍が、誰もが見習うべき手本と評される。紫式部にとって「消息体」女房批判とは、私情を離れた仕事の論であった。その分、筆は時に手厳しさをも帯びる。この態度を自分自身「さもけしからずはべる」と叱りつつ、それはむしろ論を続

20) 前掲書 pp. 189-190

行するための便法である。便法といえばそもそも「消息体」の前掲冒頭、式部は自らを「ものいひさがなくやはべるべき」と断っていた。こうして言い過ぎの自覚を見せ、許しを乞いながら、それを一つの免罪符のようにして、この後も式部は決して矛先を収めようとしなない。赤裸々さの非礼を承知しつつ、それでも書くために便法を講じた。批評する意欲が、そこまで強かった。というよりも、切実だったのである。

この女房評には、小少将の君が異質な面を持つものの、「髪、額、やうだい、もてなし、心ざま」を判断基準とした一定の型があり、大凡その外に出ない。中野幸一氏が、この女房批評の「叙述がいささか同じ調子でありすぎる」といわれ、さらに『うつほ物語』の女房の表現と照合、「一見筆者の個性的観察眼の表出と見られる日記の女房批評も、『うつほ物語』との表現の共通性を考慮に入れると、基本的には女房批評の型ともいえる大枠に従って書かれていることが知られる」<sup>21)</sup>と論じておられることが思い起こされる。そしてそれは、中宮御産をはじめとする式部の宮仕えの記事の中で、女房集団の言動を描いたものと、本質的に変わりはないのである。

#### 4. 女房の教養や才能を批評すること

以上で見てきたように、『紫式部日記』における批評の大部分は、基本的には当時の社会的な枠内のものと見られる。紫式部は、男性の領域を犯さない範囲の中で批評を行っていたと言えるが、日記の後半にある、いわば消息文の形をした批評的な部分である。寛弘六年(1009)正月の敦成・敦良親王の戴餅の儀式に参列した大納言の君、宰相の君、宣旨の君に関する感想と批評をはじめとして、その後には次のような言い出しをしている。もう一度引用してみよう。

このついでに、人の容貌を語りきこえさせば、ものいひ性なくやはべるべき。<sup>22)</sup>

「語りきこえさせば」という重い敬語の用法から、かなり身分の高い誰かに直接宛てて書いた消息文のスタイルを呈しているため、これ以下が、独立した消息文か否かについては、古来論議が重ねられてきた。現在では、「日記体では書けないさまざまのことを消息体に文体をかえて書こうとしているのである。消息の受け手は架空であろう」<sup>23)</sup>、または

21) 中野幸一(1991)「女流日記文学における『紫式部日記』の位置」(『女流日記文学講座』勉誠社) pp. 159-180

22) 室伏信助(1996)「紫式部日記の消息体文—その不思議な表現世界」(『王朝女流日記を学ぶ人のために』世界思想社)には、宰相の君から大納言の君を経て宣旨の君に至って、公的な装束の記録性を脱して次第に身体上の描写に記事が集約されてくる必然性が生まれていると指摘されている。

「以下、誰かに語るという体裁をとって女房批評を始める。このような形態は、式部が率直な心情を吐露するために用いた方法上の虚構と考えられる」<sup>24)</sup>ということになっている。いずれにせよ、紫式部の何らかの意図が働いて現在の日記に編集されていることは確かである。宰相の君(北野の三位の娘)、小少将の君、宮の内侍、式部のおもと、小大輔、源式部、小兵衛、少式、宮木の侍従、五節の弁、小馬などの女房の容貌や気性に対する批評が続き、その後は、齋院の文芸性について批評が続く。

齋院に、中將の君といふ人はべるなりと聞きはべる、たよりありて、人のもとに書きかはしたる文を、みそかに人のとりて見せはべりし。いとこそ艶に、われのみ世にはもののゆゑ知り、心深き、たぐひはあらじ、すべて世の人は、心も肝もなきやうに思ひてはべるべかめる、見はべりしに、すずろに心やましう、おほやげばらとか、よからぬ人のいふやうに、にくこそ思うたまへられしか。文書きにもあれ、「歌などのをかしからむは、わが院よりほかに、誰か見知りたまふ人のあらむ。世にをかしき人の生ひいでば、わが院のみこそ御覧じ知るべけれ」などぞはべる。

げにことわりなれど、わがかたざまのことをさしもいはば、齋院より出できたる歌の、すぐれてよしと見ゆるもことにはべらず。ただいとをかしう、よししうはおはすべかめる所のやうなり。さぶらふ人をくらべていどまむには、この見たまふるわたりの人に、かならずしもかれはまさらじを、つねに入りたちて見る人もなし、をかしき夕月夜、ゆゑある有明、花のたより、ほととぎすのたづねどころにまゐりたれば、院はいと御心のゆゑおはして、所のさまはいと世はなれ、かんさびたり。また、まぎることもなし。上にまうのぼらせたまふ、もしは、殿なむまゐりたまふ、御宿直なるなど、ものさわかしきをもまじらず、もてつけ、おのづからしかこのむ所となりぬれば、艶なることどもをつきむ中に、なにの奥なきいひすぐしをかはしはべらむ。かういと埋もれ木を折り入れたる心ばせにて、かの院にまじらひはべらば、そこにて知らぬをとこに出であひ、ものいふとも、人の奥なき名をいひおほすべきならずなど、心ゆるがしておのづからなまめきならひはべりなむをや。まして若き人の、かたちにつけて、としよはひに、つつまきことなきが、おのおの心に入りてけさうだち、ものをもいはむとこのみだちたらむは、こよなう人に劣るもはべるまじ。  
(『紫式部日記』)<sup>25)</sup>

齋院の歌についての批評は、よくよく見るとそれほど優れたものではないと、相当慎重な口調でなされている。それも、実は齋院方の女房である中將の君の手紙における、齋院の歌についての自慢ぶりに呼応する形で行われている。それから、紫式部は、齋院の歌の才能よりは、その集団全体の雰囲気の評することに流れていくのである。それは、当時は女房

23) 新潮日本古典集成本(山本利達 新潮社 1980)の頭注。p. 24

24) 前掲書の頭注。p. 189

25) 前掲書 pp. 193-194

である紫式部として批評を行うのに何らかの限界があったことを示すものと見られる。「齋院方と中宮方との比較批評」が成立する背景となるわけである<sup>26)</sup>。

それから続くのが三才女批評であり、批評という面では最も注目に値する部分となっている。従来、同時代の女房に向けられた厳しい視線や口調が指摘され、紫式部のライバル意識の表われとして解釈されてきたところである。しかも、清少納言の条における正気を失ったような興奮ぶりに、『源氏物語』のような大作を書いた作者としての洞察力や慎重性を疑わせるものと言われる個所でもある。当該の条を引用し、やや詳しい分析を行ってみる。

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ。うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉の、にほひも見えはべるめり。歌は、いとをかしきこと。ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌詠みざまにこそはべらざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの、目にとまる詠みそへはべり。それだに、人の詠みたらむ歌、難じことわりみたらむは、いでやさまで心は得じ。口にいと歌の詠まるなめりとぞ、見えたるすちにはべるかし。恥づかしげの歌詠みやとはおぼえはべらず。

丹波の守の北の方をば、宮、殿などのわたりには、匡衡衛門とぞいひはべる。ことにやむごとなきほどならねど、まことにゆゑゆゑしく、歌詠みとて、よろづのことにつけて詠みちらさねど、聞こえたるかぎりは、はかなきをりふしのことも、それこそ恥づかしき口つきにはべれ。ややもせば、腰はなれぬばかり折れかかりたる歌を詠み出で、えいはぬよしばみごととしても、われかしこに思ひたる人、にくもいとほしくもおぼえはべるわざなり。

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほど、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行末うたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすずろなるをりも、ものあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらむ。

(『紫式部日記』<sup>27)</sup>)

三人のうち、和泉式部が最初に取り上げられたのは、前出の中將の君の手紙を起点に、心と言葉との齟齬を難ずる文意を承けたものと思われる。「和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける」の「書きかはしける」は、後の「清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人」と同じく「書きかはしける人(なれ)」の省略で、上の「人」との重複を避けようとしたのであろう。「書きかはしける」を紫式部と直接手紙をやりとりした意に解する説もあ

26) 村井幹子(1993)「『紫式部日記』の『齋院』批判」(『源氏物語と平安文学』早大出版部) pp. 231-256

27) 前掲書 pp. 201-202

るが、ここでは伝聞と見る。上文の「といふ」と呼応して、この「書きかはしける」はおそらく『和泉式部日記』という作品を対象に述べたものと見てよいだろう。そうすると、原形に近い作品を自作自伝と捉えた上での評価となる。「おもしろ書きかはしける」は、下の「うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人…」を総評とせず示し、「されど」と反転して「けしからぬかた」、すなわち自由奔放な恋愛に世評を踏まえた立場から寸評を加えるが、それは非難がましい指弾ではない。「こそあれ」の逆接表現がその証しである。つまり、下文の「そのかたの才ある人、はかない言葉の、にはひも見えはべるめり」を強調する前提を成していると読むべきであろう。

その歌についても同様である。「いとをかしきこと」が総評で、以下に「ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌詠みざまにこそはべらざめれ」は、口にまかせて詠んだ歌などに必ず興ある一点の目にとまるものを詠みそえるという特長をむしろ引き出す条件になっている。しかし、他人の歌の評価に関しては、知見や理論に劣る点もしっかり押さえ、結論として「恥づかしげの歌詠みやとはおぼえはべらず」と、とどめを刺すことを忘れてはいない。

それに対して、次の赤染衛門の歌は「それこそ恥づかしき口つきにはべれ」と、まさに和泉と対照的であることをいうが具体性に乏しく、その点から見れば、歌そのものの評価というより「よろづのことにつけて詠みちらさねど」とその控え目な態度を批難する一面をもつ和泉のそれと対比して賞賛されていると読むことができよう。

その論理の延長線上に、清少納言が位置づけられることはむしろ当然と言えるが、こちらは和泉の歌に対して「真名」であり、それも「書きちらして」と指摘された点、これまた赤染の「詠みちらさねど」と対比され、酷評される条件となっている。和泉の歌評を知見や理論の点から批判していた論理が、清少納言に対してはさらに厳しく、「よく見れば、まだいとたらぬこと多かり」と徹底化したばかりでなく、「かく、人にことならむと思ひこのめる人は」と少し対象をずらして一般性を持たせながらも、「かならず見劣りし、行末うたてのみはべれば」と、将来の不幸を暗示し、さらに「そのあいだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらむ」と、特定者を予想させながら断案を下す印象すら、この末文は担い得ている。恐ろしい予言と見る向きもあるくらいである。

「このついでに、人の容貌を語りきこえさせば」と切り出した語り口が、どうして人を呪う気配のはらむ文体を生み落としたのかについては、只今すぐには確言が難しいが、ここで注目したいことは、内容的に三才女の才能について緻密な批評を行っているということである<sup>28)</sup>。平安時代には、以上で見たきたように、和歌や漢詩文の教養や学才に関する批評は、男性だけのものという認識が形成されていた。そういう認識の中で、紫式部が、同時

28) 三才女に関する批評については、福家俊幸(2003)「『紫式部日記』いわゆる三才女批評の位相」(『平安文学の風貌』武蔵野書院)にも詳しく論じられているが、特に木村正中(1992)「紫式部の女房批評」(『源氏物語講座』勉誠社)には、三才女が同輩の女房であるにもかかわらず他の女房評と切り離されている理由は、それが女房評の集団性とは異なり、文学批評をしたためであると述べられている。

代の代表的な才女である三人について、その歌詠みの良し悪しや漢詩文の表現の仕方などを取り上げて自分の考えを述べていることは、当時としてはかなり画期的なことではなかっただろうか。周知のように、平安時代は、日本においてジェンダーが確立した時代とも言われる。当時の女性は、いくら才能を発揮しようとしてもその範囲が決められており、限界があったのである。それを考えると、当該の『紫式部日記』の消息批評的な部分が如何に斬新な試みであり、中でも三才女に関する批評が如何に革新的なもの—当時のジェンダー性を乗り越えるようなもの—であったかが明らかになるのである。紫式部が当時の一般的な考え方を意識していることは、三才女批評の直後に成される紫式部自身の言説によっても伺える。

かく、かたがたにつけて、ひとふしの思ひ出でらるべきことなくて、過ぐしはべりぬる人の、ことに行末のたのみもなきこそ、なぐさめ思ふかただにはべらねど、29)

すなわち、「はべり」に自己の存在を明記しておきながら、その文脈の主格に当たる作者自身を「過ぐしはべりぬる人の」と、他者に客体化して表明するところに、卑下謙退に身をくらます方途を見出しているのである。三才女評に凝縮した情念、すなわち、学才に関する批評が、自己回帰して萎縮するポーズをとらせて緩和されているのである。結局、紫式部は、主に男性に委ねられていた教養や学才への批評を行うに当たって、それを緩和させるための様々な工夫を凝らしていることが確認されるわけである。

## 5. おわりに

現在、『源氏物語』は、世界初の長編小説として広く読まれているし、その『源氏物語』の作者が紫式部であることは誰にも否めないことになっている。従来、『紫式部日記』は、その『源氏物語』の作者が書いた日記であるにもかかわらず、それほど大きな注目を受けることはなかった。それは、『紫式部日記』を日記というジャンルの中に嵌め込み、何もかも公的な行事記録性の方に結び付けていこうとしたことに起因するのではないかと思う。作品の後半部の消息文批評的な部分についての考察や研究も、日記記録的な部分の流れの中で同時代の宮廷の様子や道長の勢力構図と結び付けられる場合が多かった。ジェンダー論のような西洋の文芸理論は、日本固有の論理を明かすのにあまり有効な概念ではないという意見もあるが、以上のように今までとは異なる視点を提供するという面では、有効に作用すると思う。『紫式部日記』は、当時のジェンダーの境界を乗り越える批

29) 前掲書 pp. 202-203

評を試みたものであり、女性による新しい批評の分野を開拓してみせていると考えられる。また、そのような紫式部の批評性は当然『源氏物語』創作にも大きな基盤となっているし、実際作品の中に繰り広げられている批評や談論—例えば、作品随所に見られる歌論や「帚木」巻の女性論、「蛸」巻の物語論など—とも緊密に繋がっていると思われる。

## 【参考文献】

- ・中野幸一(1994)『紫式部日記』(新編日本古典文学全集 小学館) pp. 145-146
- ・萩谷朴・谷山茂共編(1965)『歌合集』(日本古典文学大系 岩波書店) p. 53
- ・小島憲之・新井栄蔵共編(1989)『古今集』(新日本古典文学大系 岩波書店) pp. 24-29
- ・水谷真人(2001)「批評の共同体意識について」(『早稲田文学』26-3 早稲田文学会) pp. 52-63
- ・同氏(1999)「批評と文芸批評と」(『群像』54-6 講談社) pp. 40-62
- ・高橋昌子(1992)「批評について」(『日本近代文学』46日本近代文学会) pp. 138-142
- ・鈴木日出男(1992)「古代文学における批評と言葉」(『日本文学』4-4 日本文学協会) pp. 1-12
- ・三上満(1980)「紫式部の批評意識—時代とのかかわりをめぐって」(『中古文学論攷』1 早稲田大学中古文学研究会) pp. 25-34
- ・萩谷朴(1951)「平安時代歌合史各説(一)」(『日本文学史研究』15 日本文学史研究会) pp. 11-24
- ・杉山康彦(1950)「平安朝の女性と和歌—歌合を中心に」(『国語と国文学』27-12 東京大学国語と国文学会) pp. 3-10
- ・浜島智恵子(1961)「平安女流歌合の研究」(『愛知県立女子大学説林』8 愛知県立大学国文学会) pp. 20-37
- ・宮崎荘平(1994)「女房日記と歌合日記—その同質性についての再説」(『平安日記文学の研究』勉誠出版) pp. 25-50
- ・宇留田初実(1999)「『亭子院歌合日記』における〈記録〉と〈表現〉」(『緑岡詞林』23 青山学院大学日文院生の会) pp. 5-19

- ・西村加代子(1990)「歌合判詞と和歌の創作」(『和歌文学研究』60 和歌文学研究会) pp. 24-33
- ・小野寺迪子(1970)「歌合判詞の研究」(『国文鶴見』5 鶴見大学日本文学会) pp. 21-28
- ・拙稿(2001)「枕草子の漢詩文受容—102段の連歌を中心にして」(『日語日文学研究』38 韓国日語日文学会) pp. 276-293
- ・拙稿(2003)「藤原公任から見た枕草子の漢詩文受容—同時代における評価の模索」(『平安文学の風貌』武蔵野書院) pp. 241-260
- ・増田勝一(1993)「紫式部の容貌描写」(『並木の里』38 笠間書院) pp. 11-18
- ・中野幸一(1991)「女流日記文学における『紫式部日記』の位置」(『女流日記文学講座』勉誠出版) pp. 159-180
- ・室伏信助(1996)「紫式部日記の消息体文—その不思議な表現世界」『王朝女流日記を学ぶ人のために』世界思想社) pp. 133-159
- ・村井幹子(1993)「『紫式部日記』の『齋院』批判」(『源氏物語と平安文学』早大出版部) pp. 231-256
- ・福家俊幸(2003)「『紫式部日記』いわゆる三才女批評の位相」(『平安文学の風貌』武蔵野書院) pp. 303-322
- ・木村正中(1992)「紫式部の女房批評」(『源氏物語講座』勉誠出版) pp. 350-361

## 要 旨

平安女流日記文学をどう定義すべきかの問題は、未だに難題の一つであるが、それは平安女流日記文学が私たちの持っている文学の概念の中—それは主に近代以降の西洋の概念である—にうまく当てはまらないからである。しかしそれは、ある意味では平安女流日記文学が現代の文学ジャンルの枠を遥かに超えるところに存在し、複雑で独特な性格を持っていることを表わすことにもなる。

例えば、『紫式部日記』は現在日記(文学)として分類されているが、実際本文は日記記録的な部分と消息文批評的な部分と二つの部分からなっている。今までは、作品の全体的な性格を考えたせいか、日記記録的な性格を中心にして論じられる場合が多く、後半の消息文批評的な部分に関する考察も、日記的性格の中に収束されがちであった。ところが、本稿で『紫式部日記』の批評的な性格を独立的に取り上げ、その意味と意義について考えてみた結果、実はこの批評性こそ他の平安女流日記文学にはあまり見られない、『紫式部日記』ならではの独自の世界であり、またそれは『源氏物語』という長編物語を創作する作家意識にも深く繋がっていることが確認できた。

『紫式部日記』は、従来世界初の長編小説『源氏物語』の作者が書いた日記であるにもかかわらずあまり注目を受けなかったのは、『紫式部日記』を日記というジャンルの中にむりやり嵌め込み、何もかも公的な行事記録性の方に結び付けていこうとしたことに起因するのではないかと思う。後半部の消息文批評的な部分は、当時女性としてはあまり行っていない批評を様々な形で構築して見せようとしたものであり、特に三才女批評は、男性の領域に属するものを敢えて試みてみせているものと見られる。そのような意味で、『紫式部日記』は、当時のジェンダーの境界を乗り越える批評を試みたものであり、女性による新しい批評の分野を開拓してみせていると考えられる。また、そのような紫式部の批評性は当然『源氏物語』創作にも大きな基盤になっているし、実際作品の中に繰り返し広げられている批評や談論—例えば、作品随所に見られる歌論や「帚木」巻の女性論、「蛸」巻の物語論など—とも緊密に繋がっていると思われる。

キーワード：『紫式部日記』、批評、歌合、平安文学、日記文学、ジェンダー、三才女、女房評

투 고 : 2010. 5. 31  
1차 심사 : 2010. 6. 12  
2차 심사 : 2010. 6. 26